

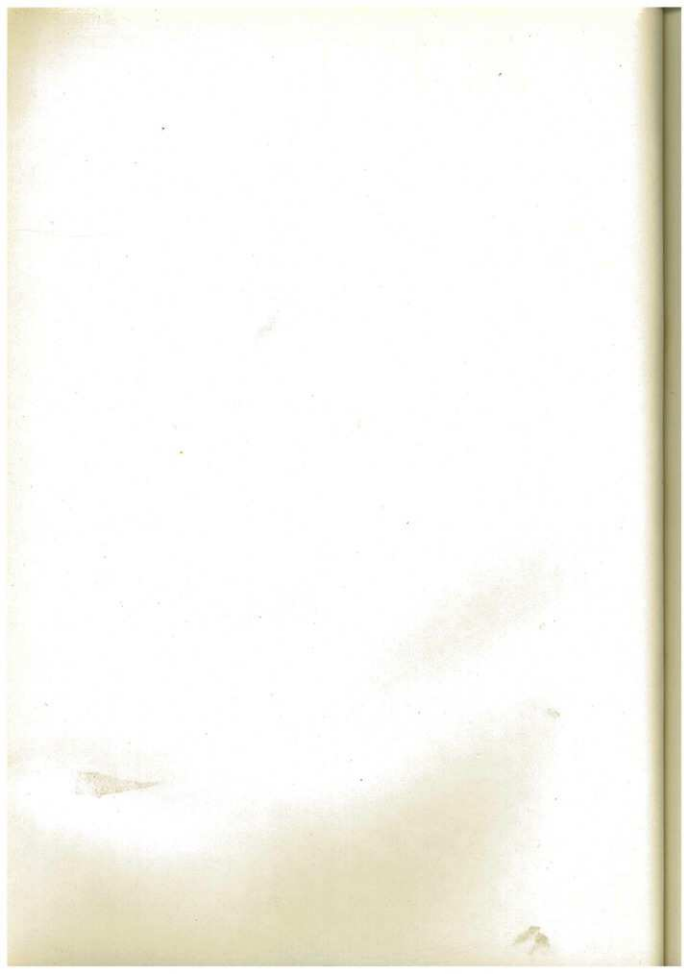
# 宇土城跡 (城山)

宇土城跡 (城山) 調査概報(1)

宇土市埋蔵文化財調査報告書第4集

1 9 8 1

熊本県宇土市教育委員会



# 宇土城跡(城山)

宇土城跡(城山)調査概報(1)

宇土市埋蔵文化財調査報告書第4集

1 9 8 1

熊本県宇土市教育委員会

## 序 文

近年、各地において自然環境や埋蔵文化財等の破壊が、後をたたない状態です。我々は、祖先の所産である貴重な文化財を保護・活用し、子孫に継承していかなければなりません。現実においては極めて困難な問題があります。

さて、宇土城は、慶長の昔に廃城となり、石垣も破壊され、三百余年の間廃墟と化していましたが、このたび、当市では本丸を中心に公園化することが決定いたしました。この公園化が現代と過去（文化財）との接点的役目を十分に果たすことになれば望外の喜びとするところであります。

今回、教育委員会が調査主体となり、公園化に先立ち国庫補助を受けて発掘調査を行ない、その結果本書にみられるような多くの成果を得ることができました。その成果が、城郭の研究及び学習の一資料としてご活用いただければ幸甚であります。

文末になりましたが、調査にあられた地元作業員の方々をはじめ、多くの方々の文化財への深い理解と、ご協力に対し深く敬意を表するものであります。

昭和56年3月31日

宇土市教育委員会

教育長 船 田 至

## 例 言

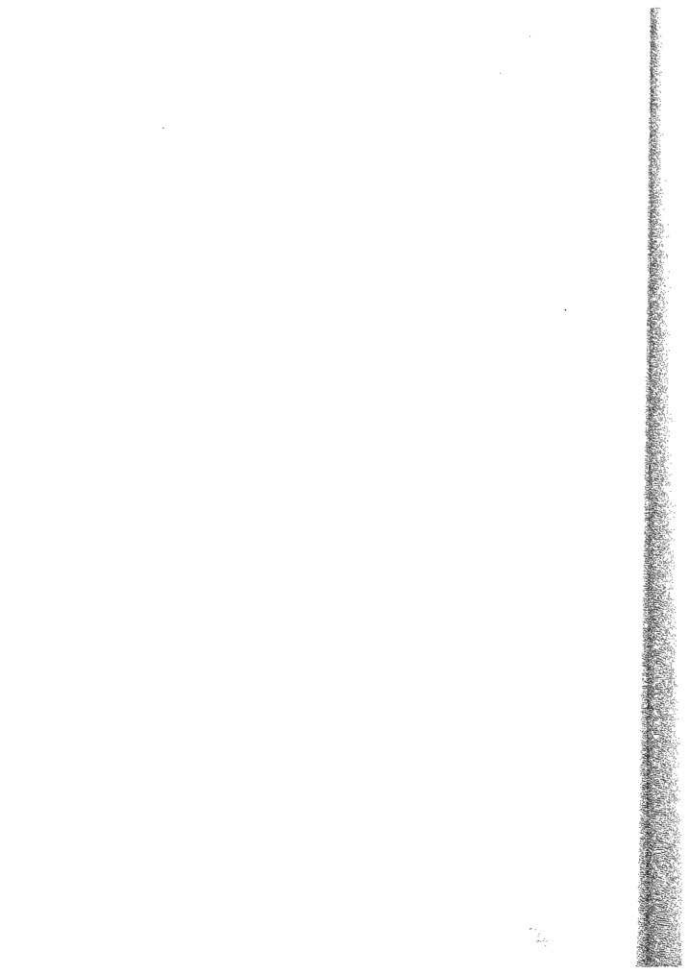
1. 本書は、宇土市教育委員会が昭和55年度の国庫補助事業として行なった宇土市古城町所在の宇土城跡（城山）の発掘調査概報である。
2. 本書には、昭和55年度の調査と前年度までの調査関係分の遺構を収録した。
3. 本文第IV章4は、熊本県教育委員会の調査成果である。調査担当者の大田幸博技師の御厚意により収録したが、その内容については、調査に参加した木下洋介の所見によるものである。
4. 本書に掲載した空中写真は、宇土市役所耕地課の提供による。
5. 本書に使用した図の作成は平山修一、浦田信智、木下によるもので製図は主に木下が行なった。
6. 本書の執筆及び編集は平山、高木の助言を得て木下が行なった。

# 本文目次

第I章 序説	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 調査地	2
第II章 宇土城跡(城山)の概要	3
第III章 本丸跡の調査概要	7
1. A-T1の調査	7
2. A-T2の調査	10
3. A-T3の調査	11
4. A-T4の調査	11
5. A-T5の調査	13
6. A-T6の調査	14
7. A-T7の調査	15
8. A-T8の調査	16
9. A-T9の調査	23
10. A-T10の調査	26
11. 小結	26
第IV章 内堀跡の調査概要	27
1. B-T1の調査	27
2. B-T2の調査	30
3. B-T3の調査	32
4. 熊本県教育委員会の調査	34
5. 小結	35
第V章 まとめ	37

## 挿 図 目 次

Fig 1	宇土城跡(城山)と周辺	3
Fig 2	宇土城跡(城山)の空中写真	4
Fig 3	本丸跡の空中写真	5
Fig 4	宇土城跡(城山)地形測量図(1/2,500)	折込み
Fig 5	トレンチ配置図(1/1,000)	折込み
Fig 6	A-T 1 トレンチ実測図(1/100)	7
Fig 7	礎石建物跡(東から)	8
Fig 8	柱穴群(北から)	8
Fig 9	礎石建物跡実測図(1/50)	9
Fig 10	巨石と長方形ピット(東から)	10
Fig 11	遺物出土状態(1/20)	10
Fig 12	土層断面図(部分)	10
Fig 13	A-T 3 トレンチ実測図(1/100)	12
Fig 14	A-T 4 トレンチ実測図(1/100)	12
Fig 15	A-T 5 トレンチ実測図(1/100)	13
Fig 16	A-T 5 トレンチ(東から)	13
Fig 17	ピット(北から)	13
Fig 18	A-T 6 トレンチ(東から)	14
Fig 19	礎石(北から)	14
Fig 20	A-T 6 トレンチ実測図(1/100)	14
Fig 21	A-T 7 トレンチ(東から)	15
Fig 22	A-T 7 トレンチ実測図(1/100)	15
Fig 23	A-T 8 トレンチ実測図(1/200)	17
Fig 24	A-T 8 トレンチ(南から)	18
Fig 25	土層断面図(1/30)	18
Fig 26	上層期遺構実測図(1/100)	19
Fig 27	上層期遺構(北東から)	20
Fig 28	下層期遺構北端コーナー部(南から)	21
Fig 29	下層期遺構南端部(南から)	21
Fig 30	下層期遺構実測図(1/100)	22
Fig 31	A-T 9 トレンチ実測図(1/100)	23
Fig 32	土層断面(南から)	24
Fig 33	石列実測図(1/60)	24
Fig 34	灰層の状態(北から)	25
Fig 35	灰層除去後(北から)	25
Fig 36	内堀跡検出の遺構配置図(1/1,000)	27
Fig 37	B-T 1 検出の石垣(東から)	28
Fig 38	石垣裏込めの状態(北から)	28
Fig 39	B-T 1 検出の石垣実測図(1/50)	29
Fig 40	石垣裏込めの状態(西から)	30
Fig 41	B-T 2 検出の石垣(北から)	30
Fig 42	B-T 2 検出の石垣実測図(1/50)	31
Fig 43	B-T 3 検出の石垣(北西から)	32
Fig 44	入隅の状態(東より)	32
Fig 45	B-T 3 検出の石垣実測図(1/50)	33
Fig 46	出隅石	34
Fig 47	内堀外縁の断面	34





# 第I章 序 説

## 1. 調査に至る経過

熊本県宇土市古城町及び神馬町所在の宇土城跡（城山）は、昭和33年3月市指定史跡となり、すでに周知の遺跡であるが、その縄張等についての、絵図・記録等の史料が少なく、その全貌を知るに至っていない。そのなかにおいて、富樫卯三郎（肥後考古学会々長）・卯野木盈二（宇土高校教諭）両氏の指導のもと、熊本県立宇土高等学校社会部によって、数度発掘調査が行なわれ、三の丸の一部が解明されている。

しかし、本丸跡の調査例はなく南西端に石垣の一部が露呈している程度で、その規模等を知るには地形図に頼るしかなかった。ところが、この本丸跡が公園として整備されることになり、当教育委員会では遺跡として十分な活用を図る為に、確認調査を実施することになった。調査は昭和53年度の国庫補助を受けて、昭和53年5月から11月中旬にかけて実施した。その結果を踏まえ本丸と内堀の一部、約2万㎡の敷地に、当時の石積み技術を取り入れるなど、復元的な設計がなされた。

また、今回、昭和55年の調査は、昭和54年7月に公園整備事業が認可され、その具体的工事が着手されるため、当該地域の発掘調査を行なった。調査は、昭和55年2月中旬から3月末までと、4月からは昭和55年度国庫補助を受けて10月まで、計約8ヶ月間にわたって実施した。

なお、調査にあたり各方面より多大の協力を得た、記して感謝の意を表したい。

## 2. 調査の組織

調査主体	宇土市教育委員会
	教育長 船田 至
事務担当	社会教育課長 久森庸助
	文化係長 一 宗雄
	高木恭二・内田憲子
発掘担当	平山修一・木下洋介
資料整理	浦田信智・山神孝弘・内田哲朗
	吉本恵子・田端幸代
調査参加者	浦田信智・山神孝弘・内田哲朗
	白石 徹・野田英治・八木 稔

宮川栄助  
 田川セツ子・山羽シマ子・上野ナツエ  
 宮田ハルエ・村田イネ・宮田ゆきの  
 土井美代子・荒川昭子・飯田ミ子  
 熊本県立宇土高等学校社会部々員

調査指導 肥後考古学会会長 高樫卯三郎  
 熊本県立宇土高等学校教諭 卯野木盈二  
 熊本県立宇土高等学校教諭 椎葉昌美  
 前館本市教育委員会文化課々長 鈴木 喬  
 熊本県教育委員会文化課技師 大田幸博  
 宇土市文化財専門委員長 井上 正 (敬務略)

### 3. 調査地

#### 昭和53年度調査地

A-T 1	古城114	平野演春氏所有
A-T 2	古城115	江口秋徳氏所有
A-T 3	古城115	同上
A-T 4	古城118	中田幸史氏所有
A-T 5	古城135	宇土市所有
A-T 6	古城119	城本年枝氏所有
A-T 7	古城110	熊本県立宇土高等学校敷地
B-T 1	古城102他	同上
B-T 2	古城106	同上
B-T 3	古城106	同上

#### 昭和55年度調査地

A-T 8	古城115他	宇土市所有
A-T 9	古城114	同上
A-T 10	古城116	同上

## 第II章 宇土城跡（城山）の概要



Fig 1 宇土城跡(城山)と周辺

宇土城跡（城山）は、熊本県宇土市古城町及び神馬町に所在する近世初頭の城郭である。熊本県のほぼ中央部から、西南西の方向へ突き出た宇土半島の基部に存在し、宇土市街地の西南端に位置する。

宇土城は、平野部に独立した低丘陵を占有する平山城で、最高所（本丸跡）標高16.3m、周辺部との比高差約13mを測る。また、この丘陵は弥生～古墳時代の包含層を有する。城跡の北方には、緑川・浜戸川によって形成された広大な沖積平野があり、県下でも有数の穀倉地帯である。西に隣接する独立丘陵（標高38～39m）には、宇土城跡（西岡台）<sup>21</sup>が位置する。さらにその南西には、大岳山系の一塊、白山（標高218.2m）があり、これから派生した支脈（標高37～58m）が東方へ延びていて城跡の南方、水田を隔て約400mの距離にあり、城内を一望することができる。また、北西約6kmの地点が現在の有明海の訂線であるが、当時はかなり深部・城下近くまで船寄が可能であり、陸・海上交通の比較的便利な地域に位置した。

城域は、外堀で囲まれ、北東隅（現在の宇土高校正門付近）を要とする扇形を呈する。東西550m、南北500m、面積約20万㎡を測る。

縄張は、本丸、二の丸、三の丸、外郭に大別でき、本丸の三方をその他の郭が取り囲む型をなす。

本丸は、北側中央やや西よりに位置する。東西約130m、南北約110m、標高16.3mを測り、 $\sqcap$ 型を呈する。また本丸は、一面平坦であるが外辺は2mほど低い幅約10mの腰曲輪がある。



石垣は打込ハギで築かれており、その一部が南西端に露呈している。天守の存在は現在のところ不明である。

内堀は、幅20m～25m、深さ約5mを測る水堀である。内縁は石垣、外縁は土堀り断面は箱形をなす。またその一部は、外堀と共有する。現在、内堀は埋土が3m以上に達し、水を溜めていないため、

Fig 2 宇土城跡(城山)の空中写真

「カラボリ」と呼ばれている。

二の丸は、本丸の西に位置し、現在共同墓地になっている。東西約60m、南北約150m、標高12.7mを測る。郭の形は大体長方形をなす。

三の丸は、本丸の南の位置する。この郭は宇土高校社会部の調査で石垣の存在が確認されていて東西約150m、南北約60mを測る。郭の形は長方形をなすと考えられ、その上



Fig 3 本丸跡の空中写真

面には東西約110m、南北約50m、高さ約2mの独立郭を有する。最高所13.6mを測る。

外郭は、本丸の東及び三の丸の南に位置する。とりわけ目立った郭もなく、標高6m~11mのなだらかな平坦面をなす。北東側は学校敷地となっており幾分削平されている。南東には神馬町域の集落が存在する。

外堀は30m~40mの幅で全周し、屈折もきわめて簡単に曲線的である。いずれも水田になっているが一部、グランドとして完全に埋められている。また、周辺部には大沼を置き、第一の要害をなしていたという。

現在、建築物はなにも残っていない。また、城下町については、現在の市街地の祖形をなしていたと考えられている。

**沿革** 関ヶ原の敗戦で小西家は存続しなかったため、本城在住時代の詳細な史料はほとんどない。文献等については現在調査中であり、色々の事項については専門の見地からの十分な検討が必要とされるので、本概報では、宇土城の沿革として『肥後宇土軍記』の一部を原文のまま掲載する。

#### 宇土之領主相知レ候分之事

付同所城地被為割焼事

#### 加藤家断絶之支

一永承三<sup>(一)</sup>年御堂関白道隆公肥後へ下向仕置在之今年宇土之城を築給ふ元禄十三<sup>(二)</sup>年迄年數六百五十三<sup>(三)</sup>年ニ成る也

一此城菊池家十一代伯耆家六代城主と云；古キ書ニハ名和伯耆守と在之也

一天正十五<sup>丁</sup>年秀吉公九州へ御下向之時四月十日宇土之城主伯耆左兵衛尉城を明退也  
一同年伯耆明退候跡へ加藤主計頼清正暫在番有之し也是ハ領主にてハ無之候へ共為心得記之置  
候なり

一同年佐々陸奥守肥後国捍領熊本之為城主併宇土之城茂領内也此時之城代不相如レ候然レ共無  
程肥後国被召放佐々ニ切腹被仰付候也

一同年壬五月十五日小西義宇土之城主ニ罷成候慶長五<sup>丁</sup>年十月廿三日落城迄小西領主之年數拾  
四年也 又落城より元禄十三<sup>丁</sup>年迄年數百四ヶ年ニ成也

一右落城已後小西領分御預ヶ地共ニ廿六万五千石清正江従家康公被下先知メ五十四万石内  
慶長四年之内十二段は五十石力ノ手合ハ有之候然レ  
内御入九段御領三段之内九段は御守たり 依之宇土も清正之領地と成り 御守有之候  
御守無之候 宇土之城繩張等清正之心  
ニ不相應之所有之由にて毎歲方々普請有之後ハ丈夫に罷成候已後ハ隱居所に可被致との取沙  
汰也慶長十六<sup>丁</sup>年六月廿四日清正五十壹歳死去迄拾貳ヶ年之間右之通清正宇土を被領候清正  
死去之歳嫡子忠廣拾歳也

一清正遠行之翌年同十七<sup>丁</sup>年忠廣代<sup>御守</sup>宇土之城を割給ふ城築より地を割ニ至迄年數五百六十  
五年ニ成也右地を割より元禄十三<sup>丁</sup>年迄八十九年ニ成也

有説ニ云地を割之義忠廣ハいまた幼少成義なれハ此方より之願ニ而ハ有之間數候半城家康公  
上意成へし清正遠行之翌年之義なれハ肥後斗ニ限たる事歟占天下一同ニ一國一城ニ可仕旨被  
仰出候由今年之夏敵追而可考也大国ハ枝城共ニ二ヶ所斗ハ在之事也於肥後ハ熊本八代両城残  
也

御家傳ニハ大坂落城已後其年元和貳<sup>丁</sup>年諸國一國一城ニ兼前ハ罷成候て直し可申也又云慶長  
十七<sup>丁</sup>年一國一城ニ成と有之候へハ元和貳<sup>丁</sup>年よりハ五ヶ年已前也

又云宇土之天守ハ三階にて有しを清正代ニ熊本之城ニ被為引小天守と名付被建置候今以其  
通也宇土之城割レ申時分ニ引ヶ候事にてハ無之宇土之城落城之翌年ニ熊本今之城ヲ取被立候  
節ニ被為引たると見へたり此次に取立候義記之可見合也

又云宇土之城地を割之節跡ハ畑と成といへとも所々石垣等ハ不損又堀形も残たる所も在之所  
ニ寛永十四<sup>丁</sup>年中肥後天草領肥前嶋原領於両所切死丹一揆縁起せり其節天草にてハ大矢野之  
内中村之古城嶋原領内にてハ原之城之古城如此古城ニ便り籠城したるニ付從江戸之依御下知  
而九筋之古城之石垣等取崩し堀ハ埋候て平地ニいたし申候由其嗣宇土之古城も石垣等取崩堀  
ハ埋め申候ニ付其形今ハ相見へ不申由也

註

- 1 富樫・他『宇土城跡(西阿台)』宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集 1977 宇土。
- 2 繩張を示す史料はなく、本概観では地形より独立する郭をそれぞれ本丸・二の丸・三の丸とし、  
その他の地城を外郭とした。
- 3 井上 正校訂『肥後宇土軍記』註1両所取



FIG. 4 宇土城跡 (塚山) 地形復原図 (1/2,500)



Fig 5 トレンチ配置図 (1/1,000)



### 第III章 本丸跡の調査概要

#### 1. A-T1の調査

本調査区は、本丸台地において最初の発掘区であるため、アトランダムに台地の南東側、12 m×4 mの南北に長いトレンチを設定した。さらにトレンチ南側に石列の一部を検出したので、東西11m×2 mの広さで拡張した。調査は、城郭に伴う遺構の存在確認を目的として行なった。

トレンチの層序は、第1層・耕作土、第2層・盛土、第3層・黒色砂質土層（灰層）に大別でき、その直下に遺構を検出した。

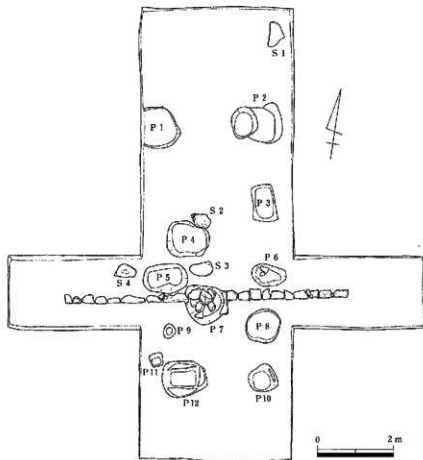


Fig 6 A-T1トレンチ実測図 (1/100)

耕作土をはぐとトレンチ北東隅からは、第2層を掘り込み、多量の瓦片を含むピットを検出した。これは後世に集め投げ込まれたものと考えられ、他のトレンチにおいても、このような状態を数多く確認した。

本調査区で検出した遺構は、礎石建物跡、柱穴・ピット群がある。

礎石建物跡は、礎石と敷地を画する石列から成る。石列は、N-80°-Eの方向で南面し、長さ7.4mを測るが両端はさらに延びる可能性がある。標高15.0m前後で、西端が少し低くなる。主に扁平横長の安山岩を使用し、南側を直線的に揃えた一段構築で、透き間には川原石を詰めている。礎石は、60cm×35cm程の不整形で扁平な安山岩を使用し、長辺を東西に置く。S2~S3、1.3m(4尺)、S3~S4、2.0m(6尺)を測る。この建物の規模及び上部構造については不明だが、トレンチ北側に検出したS1まで広がると思われる。

柱穴・ピット群は、一応まとまりをもつものもあるが、調査区域が狭いため建物として復原することは困難である。またP7は石列を切り込んでいて礎石建物より新しいが、他の柱穴の前後関係については不明である。

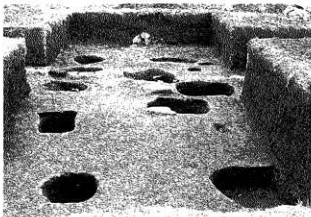


Fig 8 柱穴群(北から)



Fig 7 礎石建物跡(東から)

これらを検出した遺構面は、第3層・灰層に覆われていて、トレンチ北側で厚さ十数cmを測るが、中央部ではなくなる。この層は16世紀後半代の青・白磁、染付等の遺物包含層である。出土遺物は現在整理中で、詳しい年代については次回報告に譲るが、建物の焼失の時期を16世紀頃に求めることが出来よう。

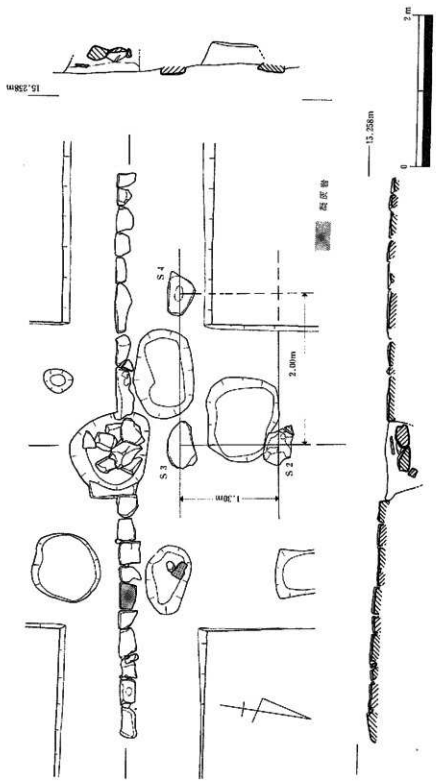


Fig 9 礎石建物跡実測図 (1/50)

## 2. A-T2の調査

A-T1の西10mの地点、石列の延長線上に東西8m×2mのトレンチを設定した。A-T1の石列に続く遺構の確認を目的として行なった。耕作土をはぐと、北西コーナーに礎石状の巨石を確認したが、原位置をとどめていない。トレンチ中央で検出した長方形のピットからは、四耳壺、平瓦等が出土したが城郭に伴う遺構の検出はなかった。また本丘陵は、弥生時代中期～古墳時代前期の遺物包蔵地であるので下層にはそれらの遺構の存在を想定したが、地表下約3m、標高13.2mの地点からは、約80個の土師器皿が一括出土した。時期は中世と考えられ、この地域が中世においても生活地として利用されていたことが考えられる。

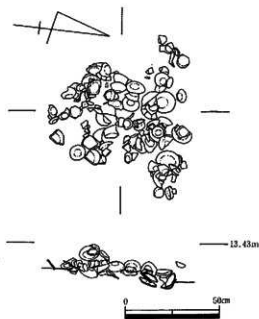


Fig 11 遺物出土状態 (1/20)



Fig 10 巨石と長方形ピット (東から)

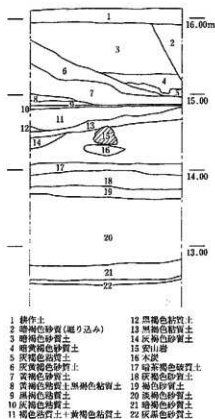


Fig 12 土層断面図 (部分)

**土層** 土層断面図 (Fig12) は、トレンチ南面中央部分である。昭和55年度に行なったA-T 8の調査で、城郭遺構が上下層2時期存在することが確認出来たので、昭和53年度調査の本トレンチの土層断面図を再検討したところ、盛土を行なっていることが判明した。下層期の遺構面は、11層の上面に該当する。トレンチ西端で標高15m、東端で14.6mを測る。東へ行くにしたがって低くなっていてA-T1で検出した遺構面に続く、8層又は9層以上が盛土である。土師器Ⅲは20層中より出土した。

### 3. A-T3の調査

本調査地は、本丸跡の中央に位置する。南北8m×4mのトレンチを設定したが、礫等が広い範囲にわたって確認されるため、随時拡張し127㎡の調査を行なった。

地表下約50cm～70cmの地点に礫等は存在する。トレンチ中央に、約10cm～30cm大の礫と約1mほどの巨石が、南北に長く、幅約4mで帯状に密集する。礫はトレンチ北側で特に密集しており、上面のレベルもほぼ同じである。方形をなす礫敷施設の存在として考えられるが、瓦細片等がこれに混入しており大部分の礫は原位置を保たないと思われ、現時点での礫敷施設の可能性は弱い。

また、巨石はトレンチ南側で検出した。礎石状を呈するS1, S2, S3は約4mの間隔でほぼ南北方向一直線に並ぶが対応する礎石は検出されていない。これにほぼ平行な位置にS4, S5, S6が直線的に並ぶ。特にS4は石垣材に近似しており原位置を保っていると思われる。

これらは同一施設ではあるが原位置をどの程度保っているかで復原的作業が大きく左右されるため、その性格を十分に把握するには今後の調査に期待しなければなるまい。

### 4. A-T4の調査

本丸跡のほぼ中央に位置し、A-T3の西側に東西19m×2mの狭長なトレンチを設定した。地表下約80cm、標高15.6m前後の地点で、瓦片まじりの角礫群及びビット群を検出した。今回の調査は確認調査のため発掘区を広範囲に広げず、狭いまま埋戻した。そのため検出した遺構の性格を十分に把握することができなかった。

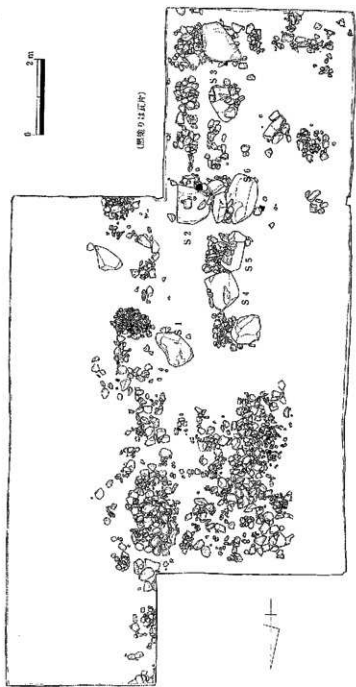


Fig 13 A-T3トレンチ英測図 (1/100)

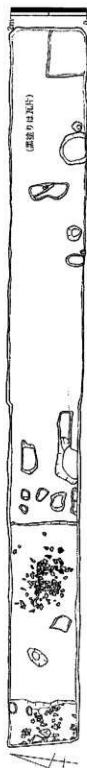


Fig 14 A-T4トレンチ英測図 (1/100)

## 5. A-T5の調査

本丸跡の西側に東西10m×2mのトレンチを設定した。地表下約40cmほどで地山面に至る。トレンチのほぼ中央に、こぶし大～人頭大の石材を含むピットを確認した。ピットの南半分がトレンチの外

にあたり全掘はしていない。長径2.2m、短径不明の隅丸長方形プランをなし、深さ約1.3mを測る。またピットからは、石材と共に瓦片・石臼が出土している。このピットの性格については不明である。

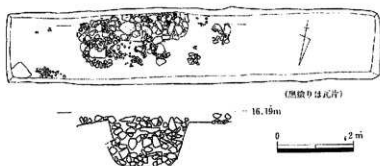


Fig 15 A-T5トレンチ実測図 (1/100)



Fig 16 A-T5トレンチ (東から)

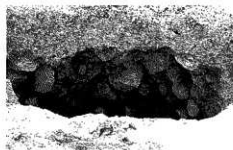


Fig 17 ピット (北から)

## 6. A-T 6 の調査



Fig 18 A-T 6 トレンチ (東から)

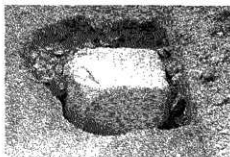


Fig 19 礎石 (北から)

本丸跡の西端、A-T 5 の西に東西 6 m × 4 m のトレンチを設定した。厚さ 25 cm ほどの表土層を除去すると、すぐ地山面になる。トレンチ東側及び中央北側に、こぶし大の円・角礫の散在が認められたが、遺構として検出したのは、トレンチ西端の礎石だけである。礎石は、100 cm × 75 cm × 50 cm の立方体をなす安山岩である。また、この掘り込み

みは、長径約 1.7 m、短径 1.2 m の隅丸長方形に近いプランをなす。深さは約 60 cm を測る。掘り込みからは、円礫にまじって瓦細片が出土したが、出土状態から見ても築城当時の埋土に含まれているものでなく後世の投げ込みによるものと考えられる。

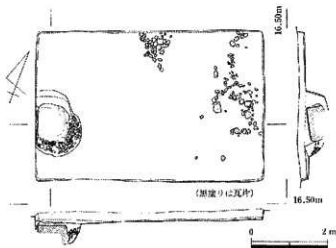


Fig 20 A-T 6 トレンチ実測図 (1/100)



## 7. A-T7の調査

本丸跡の東端、本丸台地の上面より2.5m～3mほど下がった位置に、南北約45m、東西約10m、標高13m～4mの平坦な地域があり、地形からは腰曲輪の一部と思われる。

この地域の南側に、東西に長い8m×2mのトレンチを設定した。表土層を除去すると、すぐ地山面になる。トレンチ両端から東端へ約90cm下る地山面からは、耕作時に振り込まれた溝、南北5条、東西1条を検出した。

また、B-T1で確認した石垣の上部にあたるため、塼などの施設の存在が十分に考えられたが、削平を受けているため、城郭に伴う遺構の検出は出来なかった。



Fig 21 A-T7トレンチ (東から)

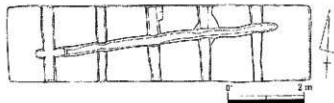


Fig 22 A-T7トレンチ実測図 (1/100)

## 8. A-T8の調査

本調査区は、本丸台地の北東、B-T3検出の石垣入隅の上部に位置する。調査は、昭和55年度に実施し、これまでの調査の中で最も注目する成果を得た調査区である。その成果とは、土層断面（Fig 25）が示すように、二時期の遺構の存在を確認したことである。それらは共に城郭としての性格を有するもので、上層に伴なう遺構を上層期遺構、下層を下層期遺構とし、以下、これらの概略を記す。

### 上層期遺構

これまでの調査を通して分かるように、上層期遺構の破壊は著しく、原位置を留めるものは断片的である。このため検出した遺構の全容や細部については不明な点が多い。本調査区も、その例外ではないが、部分的に確認出来た遺構から、長辺をほぼ南北に置く8m×6m程度の建物跡が想定できた。

その北辺は、N-78-Eの方向で北面する石列である。60cm～80cm大の安山岩割石の一段構築で高さ約30cmを測る。基底部には小ぶりの割石を敷いている。石列の西端は一石を欠く、東端は崖に至っており遺存はしないが、B-T3検出の東西方向石垣の天端石に続くものと考えられる。この石列の南に平行する4石の巨石を検出した、上面のレベルは同じであり、形状などから礎石と思われる。東辺は、大ぶりの石とその両側に1石ずつ計3石を検出、一直線に並び東面する。方向は、前記の石列と直角をなす。さらに東には、幅約20cmの側溝を隔てて、西面する石垣がある。基本的には打込ハギで築かれていて、3～4段ほど遺存し、検出した長さは約2mと短い、これも前記の石列と直角をなす。南辺は、石材使用の施設はなく、急勾配で上面に至る。西辺は、幅約2mの溝状の掘り込みに区切られている。この部分にも東辺同様、石垣の存在が考えられるがこれを示すものは検出されなかった。

さらに西側は、溝底から1.8mほど高くなり、礎石と南北方向の石垣を検出した。礎石は最大長1.4mを測るが上面はかなり傾いている。また石垣は、下層期遺構の石墨の直上にほぼ同じ方向で築かれている。主体をなす積石3石を検出した。北側の積石は、抜き取られ裏込めと掘り込みだけを残す。南側は、完全に消滅している。これらの上部構造については、現在のところ不明である。

また、出土遺物のほとんどが瓦片でありその量はコンテナ60箱に及ぶため、現在整理中である。報告は次号に譲る。

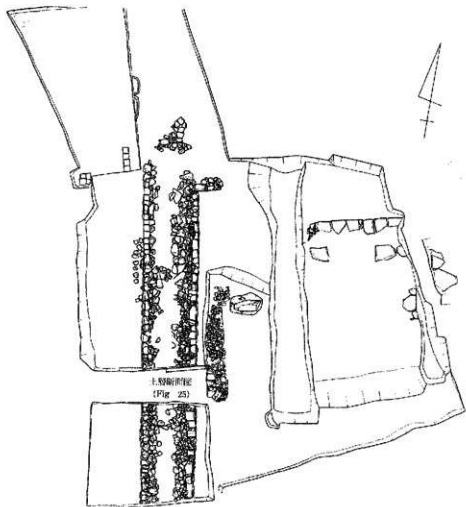


Fig. 23 A-T 8 トレンチ実測図 (1/200)



Fig 24 A-T8トレンチ (南から)

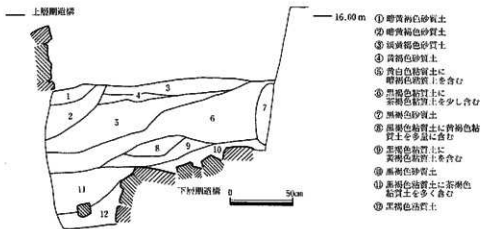


Fig 25 土層断面図 (1/30)





Fig 27 上層期遺構 (北京から)

#### 下層期遺構

下層期検出の石塁は、ほぼ南北方向 ( $N-8^{\circ}-W$ ) で長さ38.7m、幅 2.8mを測る。北端は、同じ幅で東へ直角に折れ、約 1.2mほどで消滅している。南端は、城門跡と考えられ、2個の礎石を確認した。

石塁は、基本的には野面積みで築かれており、断面形は梯形を呈する。高さは、天端が破壊されているため不明である。東壁は、控も厚く、丁寧な石積みであり、使用石材にも、長辺1.9mと長大なものもある。西壁に比べると堅固で勾配も急であり、防御の面からも外壁と考えられる。西壁(内壁)は、南北両隅石を欠く、部分的に石積みが異なり、比較的簡単に積まれている。基底面は、北端に近づくに従って高くなり、外壁との比高差約80cmを測る。

この石塁の上部には塼が回っていたと思われるが構造物を示すものは検出されていない。

石塁南端の西側に、約80cm×60cmの同形状の礎石2個を検出した。これらは城門の控柱の礎石と考えられ石塁の長辺と直角をなし、柱間 215cmを測る。城門部の地山は堅くしまり、なだらかな傾斜で外方へ下がる。また、対応する部分は未調査ではあるが、同様の石塁・礎石が対称形をなすと考えられる。

使用石材は、その大部分が転石である。細分は行っていないが、多種多様であり、形につ

いては、扁平で安定のよいものを面に使用している。また、加工のあるものは、凝灰岩の他に数石確認したが、凝灰岩の切石は、五輪の塔（地輪・火輪）の転用であり、その他の加工石も二次的に転用されたものと考えられ、石室構築にあたっては、石材個々についての加工は行っていないことになる。このことは、構築に、技術的あるいは時間的制約を受けたものと考えられよう。遺物は染付片が数点出土している。

註  
1 富樫直一「守土輪石室の転用石材から」『夜叉史』第45号 1976 八代。



Fig. 28 下層期遺構北端コーナー部（南から）



Fig. 29 下層期遺構南端部（南から）

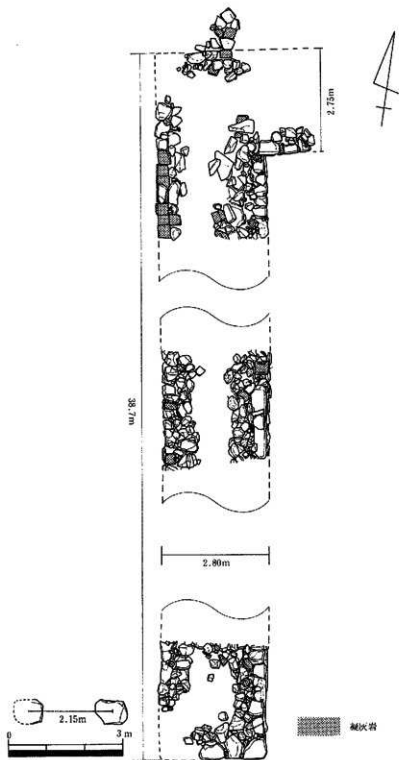


Fig 30 下層期遺構尖洞區 (1/100)



### 9. A-T9の調査

本調査区は、公園整備計画で恒久的施設の建設地域である。本丸跡の東側、A-T1の北に建設範囲の10m×10mのトレンチを設定した。現地表面の標高は16m前後である。

トレンチの層序は、約20cmの耕作土があり、その下の土層はいわゆる版築の状態を示す盛土であり、互層をなす黄褐色系の砂質土は基盤層と同一である。これは、内堀を掘った際の盛土と思われ、約2mに及んでいる。

また、A-T8の調査では、二時期の城郭遺構を確認したが、このトレンチでは、上層における遺構（石垣・柱穴等）は検出されなかった。下層期遺構は、地表下約2m、標高14mの地点で南北に延びる石列の一部を検出した。

石列は、黒色砂質土（灰層）で覆われており、特に石列前面では厚く十数cmを測る。本調査

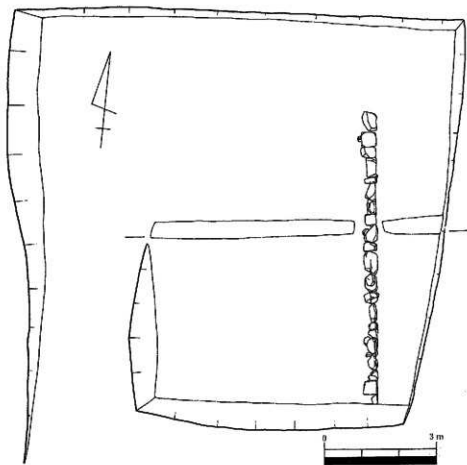


Fig 31 A-T9トレンチ実測図 (1/100)

区の遺物は、ほとんどがこの層からの出土である。

### 石列

石列は、ほぼ南北方向（N-11°-W）で東面する。長さ約8mを検出したが、南端はさらに調査区外に延びる。基底面は、標高13.8m前後で北端に近づくに従ってわずかに低くなる。石列の構築は、東辺を一直線に揃え、比較的扁平な転石と凝灰岩の切石を2～3段ほぼ垂直に積み、部分的に小石をつめて固定している。高さ約50cmを測る。また、石列の背後には、石列とほぼ同じ高さに土盛りを行ない基壇状を形成している。建物の存在を示す礎石・柱穴の検出はなかったが、上部構造の一部を示す遺物が灰層中より出土している。

また、石列は、A-T1検出の石列とほぼ直角の位置にある。

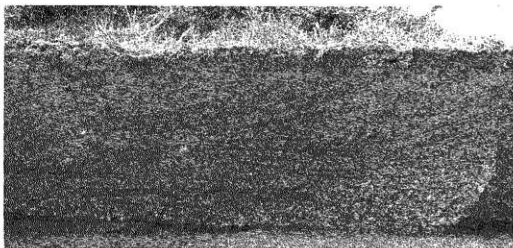


Fig 32 土層断面 (南から)

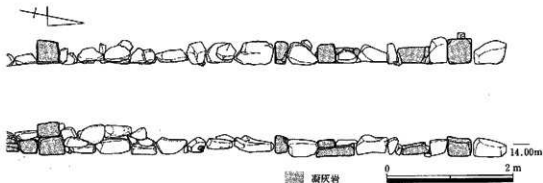


Fig 33 石列実測図 (1/60)



Fig. 34 灰層の状態 (北から)

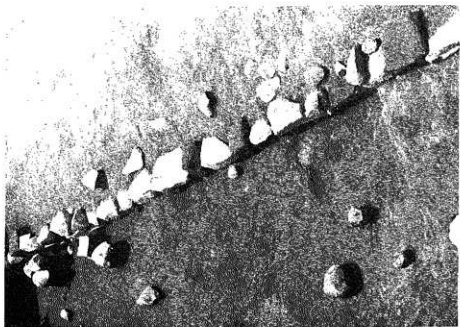


Fig. 35 灰層除去後 (北から)

## 10. A-T10の調査

本調査区は、本丸台地の南端、台地上面より約2.5m下がった標高13.3mの地点に位置する。A-T7同様、腰曲輪の一部と考えられる。

調査前は畑地になっており、地表下約50cmで黒色土に達する。この層からは、弥生時代後期に比定できる土器が多量に出土し、これに混じって貝層・獣骨等も出土している。

ところが、このほとんどの土器が原形を保っておらず、開元通宝（初鑄621年）、紹聖元宝（初鑄1094年）も伴出し、出土状態からも後世の擾乱を示すものであり、築城の際の改変と考えられる。

## 11. 小 結

本丸跡は、昭和53、55年度の二度にわたって、10ヶ所のトレンチによる調査を行ってきた。今回、A-T8の調査により、城郭としての性格を有する二時期の遺構の存在が確認できたため、これまでに検出した遺構をそれぞれの時期に分類し、下層期遺構の特徴にふれ本章の小結としたい。

### 上層期遺構

A-T3（巨石、礎群）、A-T6（礎石）、A-T8（建物跡）

### 下層期遺構

A-T1（礎石建物跡）、A-T8（石塁）、A-T9（石列）

以上のように分類できる。

また、次章で概要を述べる内堀跡検出の石垣も、上層期に該当するので、上層期遺構の特徴については、第IV章5に記す。

### 下層期遺構の特徴について

下層期遺構の特徴は、A-T8検出の石塁にその多くを見ることができる。それらは、基本的には野面積みで築かれており、種々雑多の自然転石を使用している。積み石には、加工跡を示すものはほとんどなく、一部、凝灰岩の切石があるが、これらは五輪塔の地・火輪の転用であり、構築にあたっての石材の加工はなかったものと考えられる。面には、主に扁平横長の安定のよい形のもの、水平に配置し築いている。全体的に小ぶりなので面の凹凸はさほどなく、隙間にはところどころ小石をつめ、比較的簡単に覆われているなど一部技術的制約の問題は残るにしても、築城は、急速に工事が行なわれ、短期間に完成したと考えられる。

また、検出した石塁及び石列は、南北に平行あるいは直角に築かれており、企画性を持つ縄張であったと推定できる。

## 第IV章 内堀跡の調査概要

### 1. B-T1の調査

本調査区は、本丸東側の内堀に位置する。調査は、石垣の遺存と内堀の状態確認を目的として行なった。本丸台地の崖面直下から堀の中央に至る12m×4mのトレンチを設定した。このトレンチは、比高差1.5mほどの2段の畑に跨っており、表土層以下のレンズ状に堆積した土砂を除去すると、全面に人頭大の礫石やくさび跡のある安山岩の積み石など、石垣使用材の転石を検出した。この多量の転石は、現存する石垣の高さから堀の中央部まで達しており、破壊時の様相を示している。

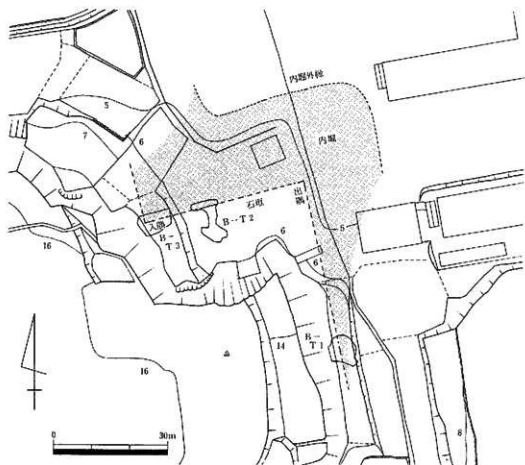


Fig 36 内堀跡検出の遺構配置図 (1/1,000)

掘底確認のため、トレンチを東へ1.5mほど拡張したところ、地表下約3m、標高2.9mの地点で有機質土層とその直下に黒色砂層を確認した。この黒色砂層の上面が堀底と思われるが、堀に落ち込んで石材がかなりの量になるので、幾分押し上げられているものと考えられる。

石垣面を覆う転石の除去は人力による作業が不可能である為、重機を使用した。

石垣の検出は、遺存の良いところで標高3m~6.6mの間で石積みが10段、悪いところでは3m~5.2mの5段、長さ約4mほどである。標高3m以下は湧水が著しい為、基底部までは至らなかった。

石垣は、打込ハギで築かれており、ほぼ南北方向(N-7.5°-W)で東面する。傾斜角は標高4m~5mの間で68°を測り、断面形はわずかに弓状を呈す。裏込めには約10cm~30cm大の円礫を主に使用し、厚さ約50cm~80cmを測る。また石垣面から地山までは1.1m前後である。



Fig 37 B-T1 検出の石垣 (東から)



Fig 38 石垣裏込めの状態 (北から)

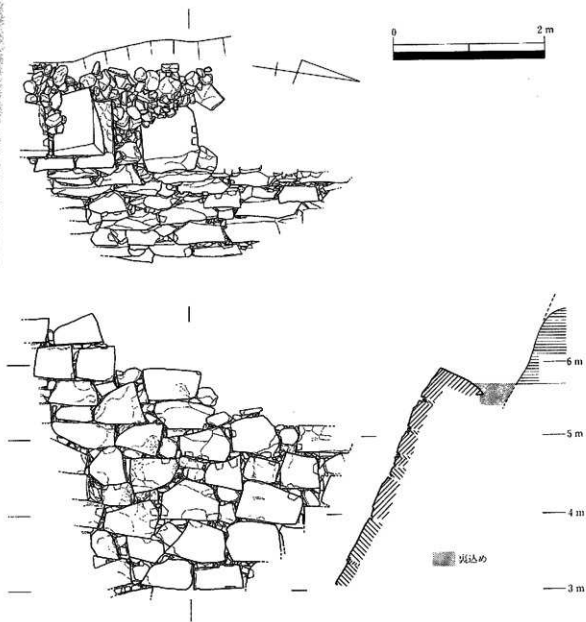


Fig 39 B-T 1 検出の石垣実測図 (1/50)

## 2. B-T2の調査

本調査区は、本丸北東の内堀に位置する。B-T1で検出した石垣と直交する石垣の確認を目的とした。

この調査区も、B-T1同様崖面直下に石垣の存在を想定したが、石垣は約20mほど北側の地点で検出した。これは地山である砂質土が、グランド用客土として多量に削り取られた為である。また石垣の遺存も地表下約2m以下とあまり良くなくこれも新しい石垣材として転用された為であろう。

石垣の検出は、標高3m~3.8mの間で石積み2段、長さ約6.5mに及ぶ。

石垣は、打込ハギで築かれており、ほぼ東西南方向(N-80°-E)で北面する。傾斜角は、測定の間隔が短い為71°を測る。断面形については不明である。裏込めは約10cm~25cm大の円礫を、厚さ約80cm~1mほど詰めている。石垣面から地山までは約1.2mを測り、地山は黄褐色砂質土である。湧水の為、基底部まで確認することは出来なかったが下部には残り2~3段存在すると思われる。



Fig 40 石垣裏込めの状態 (西から)

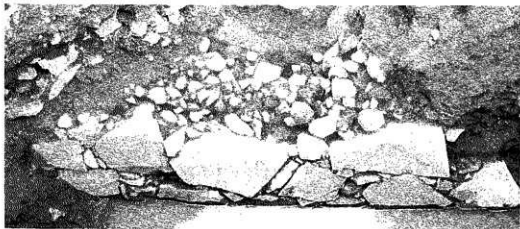


Fig 41 B-T2検出の石垣 (北から)



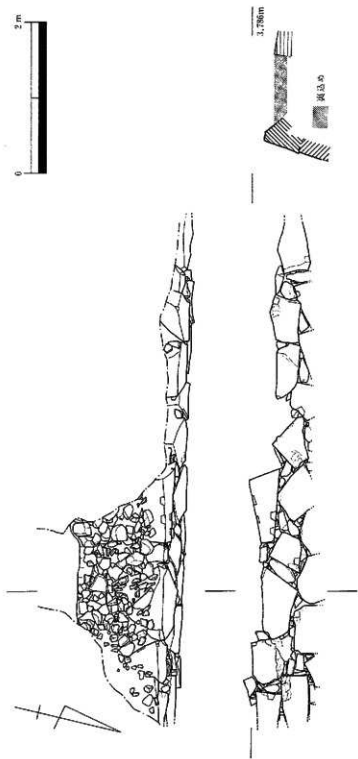


Fig 42 B-T 2 検出の石垣実測図 (1/50)

### 3. B-T3の調査

本調査区は、A-T8の直下、B-T2の西方約15mの内堀に位置する。調査は作業の安全上、重機を用い、入隅の検出に努めた。

検出した入隅は、大体L型をなす本丸の北東に位置し、B-T2で検出した石垣が西へ延び、北へ方向を変えるコーナー部（入隅）である。

入隅は、東西方向の石垣（E-W石垣）と南北方向の石垣（N-S石垣）がほぼ直角をなす。

E-W石垣の検出は、良いところで、標高3m~6.8mの間で、石積み9段、悪いところでは4m~5mの3段、長さ5.4mほどであり、入隅に近づくに従って遺存が良い。また、N-S石垣は、標高3m~4.4mの4段、長さ1.3mを測り、E-W石垣に比べると2m以上も残りが悪い。標高3m以下は湧水のため調査することが出来なかった。

石垣は両方向とも打込ハギで築かれており、N-S石垣はN-10°-W、E-W石垣はN-78°-Eで2面のなす入隅の角は88°を測り、やや鋭角気味である。入隅石積みのかみ合わせは、深くはない。傾斜角は、N-S石垣は61°、E-W石垣は77°を測る。E-W石垣の断面形は、上部が若干せり出しており、わずかに弓状を呈する。またN-S石垣は、検出面が短いが、これも弓状を呈するものと考えられる。裏込めの厚さは、入隅の検出が崖面の直下であつたため、確認することが出来なかった。



Fig 43 B-T3検出の石垣（北西から）



Fig 44 入隅の状態（東より）

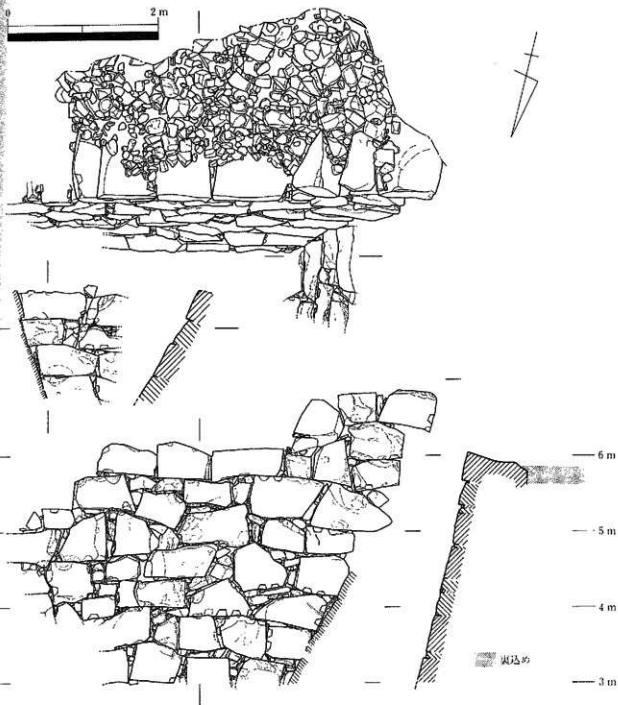


Fig 45 B-T 3 検出の石垣実測図 (1/50)

#### 4. 熊本県教育委員会の調査



Fig 46 出隅石

城域の一面を有する熊本県立宇土高等学校第2グラウンド整備事業の事前調査として熊本県教育委員会文化課が、昭和55年9月下旬に実施した発掘調査である。まだ、報告は成されていないが、宇土城の縄張を知る上で重要な成果が得られた。調査を担当された大田幸博技師の御厚意により、本概報にその概要を収録することが出来た。

これまでの市教委の調査により、出隅の位置は大まかには判明していたが、この調査により点として確認することが出来た。

出隅 (Fig 46) は、B-T1.

北約45m, B-T3入隅からは43mを測り、通例見られる算木積みで築かれている。東側石垣面には、焼痕を示すススが付着している。出土遺物のほとんどが瓦で、他のトレンチ出土のも



Fig 47 内側外縁の断面

のより小型である。

また、内堀外縁の調査も行なわれ、Fig 47に示すように斜に掘り込んだ素掘りである。平面形は、石垣と平行しており、掘幅は、約23mを測るが学校用地となって以来削平を受けていて、当時の幅はかなり広くなると思われる。

## 5. 小 結

内堀跡検出の石垣の方向と傾斜角は、次のようになる。

トレンチ名	方向	傾斜角	
B-T1	N-7.5°-W (南北)	68°	
B-T2	N-80°-E (東西)	71°	
B-T3	N-S	10°-W (南北)	61°
	E-W	N-78°-E (東西)	77°

### 石垣の特徴

内堀跡で検出した石垣は、すべて打込ハギで築かれており、石材もすべて安山岩であるなど、積み石・構築についても画一的である。

石垣面を構成する積み石は、その大きさに二分出来る。主体をなすものは、面の大きさ60～80cm×30～80cm、柱の長さ70～90cmを測る。一面に1～3個のくさびを入れ、削口もシャープである。形は長方形を呈す。次に間隙をつめるもので大きさは15～30cm×10～20cm程度でさまざまな形の割石を用いており、さらにこれらの挟間をくさび形の飼石を打ち込み、面を強固に整えている。裏込めは、主に10～30cm大の円礫を用い、厚さ50～80cmを測る。目地は、横方向は水平に、縦方向は斜めに通っており、積み石の負荷が直下の二石に分散されるように積まれている。

このように打込ハギで築かれた石垣の断面形は、若干の弓状を呈し、面の凹凸はほとんどなく、傾斜角61～77を測る。石垣の復原高は11～13mと堆定でき、内堀と共に堅強な防禦施設をなしていたと思われる。

以上が外見観察上の特徴である。



## 第V章 まとめ

昭和53・54・55年度に実施した宇土城跡(城山)の調査は、前章にその概要を記した。調査は継続中であり、部分的な調査が完了したのみで、その全容を知るに至っていない。また、遺物の整理も今後に残されているが、今回までの調査で特に注目される問題について若干の考察を加えてまとめにかきたい。

今回までの調査で最も注目される成果としてA-T8の調査があげられる。Fig 25で示すように上・下二時期の遺構が認められた。それらは共に城郭としての性格を有するものであり、それぞれの時期(城主)の比定をこころみた。

### 上層期遺構の時期について

関ヶ原(1600年)以後、江戸時代になると全国各地の主な城郭は修築がなされ、より一層堅固なものとなる。それに伴い石垣もまた壮大堅固なものとなり、近世城郭の完成期にはいる。

この時期に修築された城郭の石垣は、桃山時代に築かれた石垣とは、外観の趣を異にする。つまり積み石の稜線もよりシャープになり、合端の隙間も密になり、かなり整った面を形成するようになる。これは館本城をはじめこの時期のほとんどの城郭に見られる構法である。上層検出の石垣は、これに類似する構法で築かれており同時期の所産と考えられる。

従来から、宇土城(城山)は小西行長(1600年没)の居城として知られてきたが、今回の調査により小西以後の遺構が存在することを確認できた。つまりこの時期の遺構は『肥後宇土軍記』にみられる加藤清正普請に該当するものと考えられる。また、「慶長十三年八月吉日」銘の軒平瓦<sup>註1</sup>や加藤家々紋の枯梗紋瓦が出土していることは、これを示唆するものであろう。また、これまでに宇土高校社会部の実施した三の丸検出の石垣<sup>註2</sup>もこの時期の所産であり、現状をなす縄張のほとんどが、小西行長没後の加藤清正の手によるものと考えられる。

### 下層期遺構の時期について

下層期遺構の概要及び特徴については、第II章に記しているもので、ここではこれらの時期について考えてみたい。

時期を考えるに、まず出土遺物であるが、今回は、その報告を掲載することが出来なかったが、A-T9灰層出土の遺物、中国製染付や備前焼の小甕は、16世紀後半代に相当するものと考えられる。

次に、石塁より時期を考えるならば、その構築法は、肥前名護壘城大和中納言秀保跡<sup>註3</sup>、対馬清水山城の断面が梯形を呈する石塁に類似しており、積み石には若干の差異は認められるが、

ほぼ同一時期と考えられる。この二城は、文禄・慶長の役に際し築かれ、当時宇土城主であった小西行長も同役に参画しており本城検出の下層期遺構は小西行長の縄張の一部と推定できよう。

以上、主たる問題について概要を記したが今後検討を加えなければならない点が多くあり、本報告において詳細な検討を加えたい。

註

- 1 富樫卯三郎「宇土城（城山）出土の軒平瓦」『宇土市の文化財第3集』P24 1977 宇土。
- 2 卯野本益二「宇土城（小西城）調査報告」『宇土城跡（西岡台）宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集 1977 宇土。
- 3 田平・橋渡・久保・中村『名護屋城跡並びに陣跡発掘調査報告書1』佐賀県教育委員会 1979 佐賀。





---

## 宇土城跡（城山）

宇土城跡（城山）調査概報(1)

宇土市埋蔵文化財調査報告書 第4集

1981年3月31日

発行 宇土市教育委員会

印刷 籧下田印刷

---

